

各地で被害が多発している ミカンサビダニを防ぐ

かんきつの上に寄生する微小な害虫

ミカンサビダニは、本州、四国、九州に分布し、成虫でも0.18mmと微小なダニである。食性も狭く、かんきつの上に寄生する。果実、葉、枝上に寄生して、密度が高くなると葉裏に黒褐色斑を生じ、新葉では変形することもある。とくに、果実が激しく吸汁されると茶褐色のサビ症状を引き起こし、商品価値を著しく損なうことになる。

ミカンサビダニは、冬場は芽の鱗片内で成虫が越冬する。4月になると新葉に移動し、産卵をおこない増殖する。果実への移動は6月下旬から始まり、7月下旬～8月下旬に密度がピークを迎え、10月に入り低温になると、再び鱗片に移動し越冬する。

防除適期の予防的な薬剤散布が重要

従来、ミカンサビダニの防除では、黒点病の防除にジチオカーバメート系薬剤（ジマンダイセン、エムダイファー、ダイファーなど）が年に数回散布され、同時防除されていたため、被害

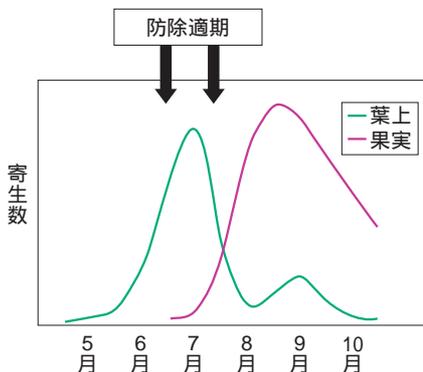
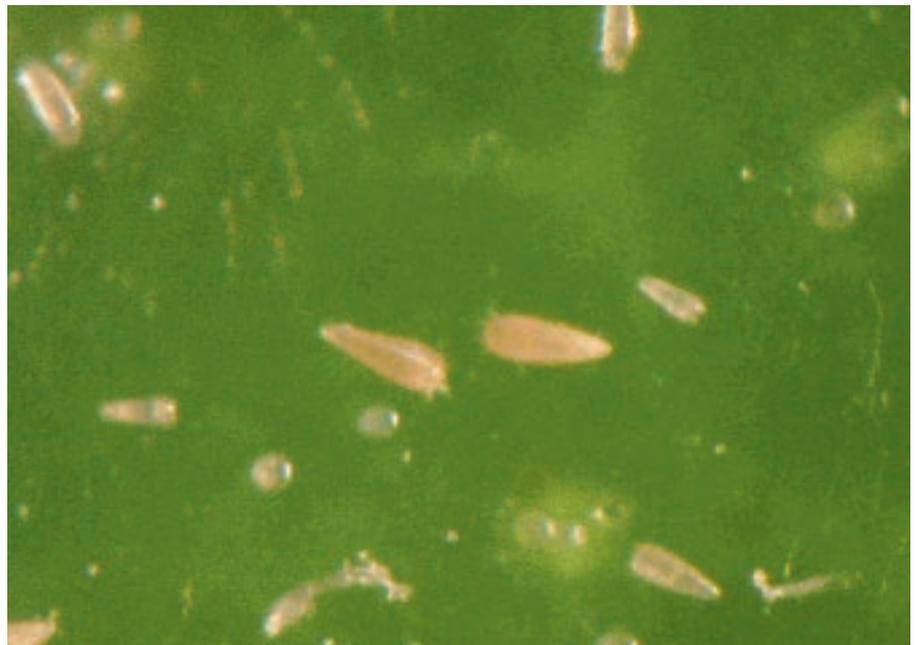


図 - 1 ミカンサビダニの発生消長と防除(モデル)



本州、四国、九州に分布し、成虫でも0.18mmと微小なミカンサビダニ

はほとんど問題とはなっていなかった。しかし近年、ジチオカーバメート系薬剤に対する薬剤抵抗性が拡大し、各地で被害が多発するようになった。ま

た、ミカンサビダニにも高い効果を示すハダニ剤が、秋ダニ中心の防除に変わったことで6～7月の重要な防除時期にほとんど散布されなくなったこと

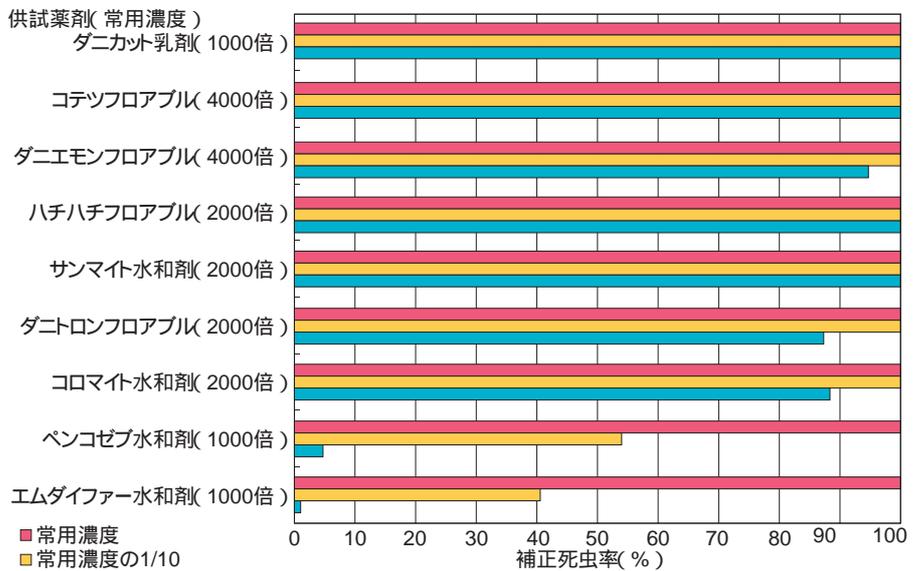


図 - 2 ミカンサビダニ成虫に対する各種薬剤の活性(処理2日後)

も、被害が多発した一因となっている。

ミカンサビダニは、微小な害虫のため肉眼では発見することができず、被害が拡大してから発生に気づくことが多いので、防除適期に予防的な薬剤散布をすることが重要である(図-1)。

成虫、卵に対する薬剤感受性検定

農薬研究室では、ミカンサビダニの薬剤感受性検定を実施した。その結果は図-2、3に示すとおり。

ミカンサビダニ成虫に対しては、ダニカット乳剤、コテツフロアブル、ダニエモンフロアブル、ハチハチフロアブル、サンマイル水和剤、ダニトロンフロアブル、コロマイル水和剤は常用濃度の1/100濃度まで補正死虫率80%以上を示した。ミカンサビダニ卵に対しては、ダニカット乳剤、ダニエモンフロアブル、サンマイル水和剤、

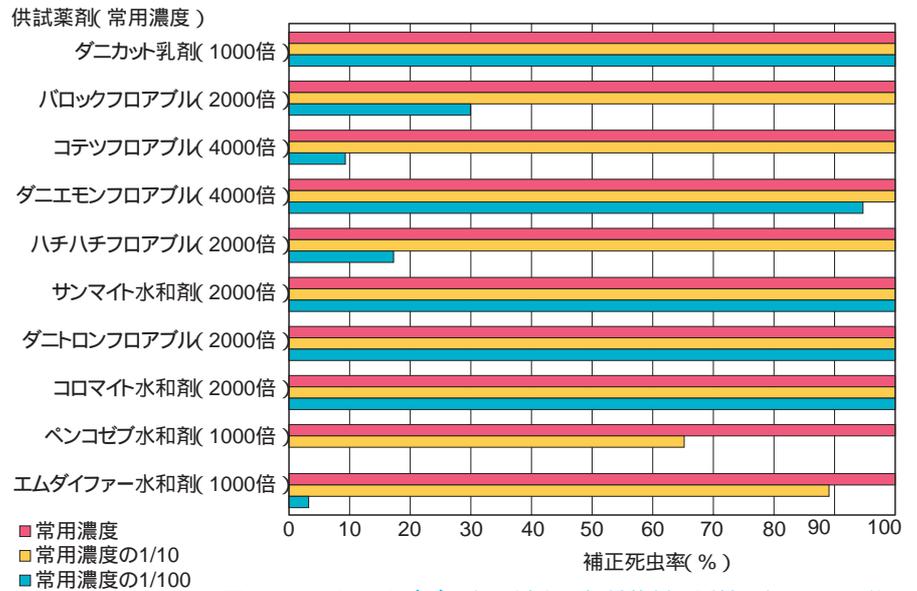


図-3 ミカンサビダニ卵に対する各種薬剤の活性(処理10日後)

ダニトロンフロアブル、コロマイル水和剤は常用濃度の1/100濃度まで補正死虫率80%以上を示した。また、パロックフロアブルは、ミカンサビダニ卵に対して高い効果が認められた。

農薬研究室では、今後もミカンサビダニの薬剤感受性検定をおこない、情報提供をしていきたい。

【全農 営農・技術センター
農薬研究室・中村泰久】